

第1章 風水総論

1 風水とは

(1) 風水の概念

風水の歴史の中で晋の時代に実在した郭璞かくはく（276～324年）が書いたとされる（郭璞に仮託されたとの説もある）風水の原典「葬経」には

「葬者乗生氣也。氣乗風則散，界水則止。古人聚之使不散，行之使有止，故謂之風水。風水之法得水為上，藏風次之。」

翻訳文「葬者は生氣に乗るなり。氣は風に乗じて散じ、水に界くまられれば則ち止まる。古人はこれを聚めて散ぜじめず。これを行いて止めるあり。ゆえにこれを風水という。風水の法は得水を上とし、藏風を次とする。」という有名な言葉を残している。

埋葬するときは生氣に接することだ。その氣というものは風に吹かれると散ってしまうが、水に接すれば止まる。先人はこれを集めて散らないようにした。これを止めて使ったのだ。故にこれを風水という。風水の法

は得水を上とし、蔵風を次としたということは、水がある場所を第一とし、山がある場所を第二の要件としたものと考えられる。また蔵風得水は「風を屏風のような山が藏め水を得る」ことである。

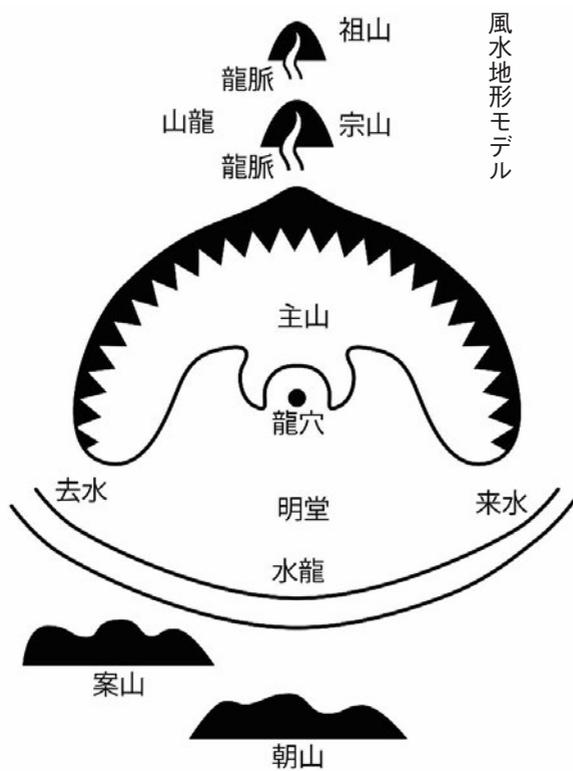
葬者は言葉で、いわゆる陰宅（墓地風水）のことが重要視されていたように思えるが、中国では古代より陽宅と陰宅の両方を整えることが一族の安泰をもたらすものとされてきた。

中国風水で良く使われる言葉に「山管人丁水管財」がある。山は人の健康を管理し、水は財を管理するというものだ。その意味を考えると、山から発生する気によって健康面に恵まれ、良い男の子（跡取り）が生まれ一家が繁栄する。一方、水は水運による財貨の移動を意味する。かつては川や運河のそばに蔵屋敷が立ち並んで商業が盛んとなった。つまり、川のそばに財があるという様子を表すものである。察するに家族が多くてもお金に恵まれないのは良くない。ある程度お金があれば一家は繁栄するという考えであろう。しかしながら安定した山に支えられ、水に面した地形が大吉であることは間違いないのだ。

風水の理想的な地形は秀麗な高山があつて祖山と呼ぶ。大地の気が発生する場所である。そこを起点に山脈を形成している。この山脈を気の通り道として龍脈という。途中には租山よりも低い秀麗な山があると宗山と呼ぶ。龍脈の中継地点である。それからさらに先に龍脈は伸び、平地部の手前にある山が主山である。主山は山裾が両側に広がって屏風のように強風を防ぐ働きをしている。向かつて右側を青龍、左側を白虎とする。場合によっては主山の内側に馬蹄形の小山が接した地形を見ることがある。直前にある龍穴を二重に守っているのだ。

龍穴の前方には平地が広がり、これを明堂と言う。その平地を取り巻くように川が流れているのを水龍とする。主山の前面で上流側を来龍、下流側を去龍という。これが得水であつて、山の麓にある龍穴から発生する

気は前方にゆるやかに進み、やがて川に接してそこで止まるものとした。川の代わりに湖水であっても良いとされる。このような地形を風水の吉地と位置づけた。



同様な地形が実際にある。兵庫県高砂市と加古川市にまたがる高御位山（たかみくらやま）標高304m。山形は馬蹄形をしていて図に良く似ている。龍穴にあたるところが高砂市公園墓地となっている。

(2) 易経と風水

易経と風水が同じものではないが関係するものとして述べておきたい。易は日と月という二つの文字が組み合わさってできている。また、易は蜥蜴という文字に組み込まれている。これは蜥蜴の色が見る方向から変化するためと言われている。森羅万象という言葉があるが、この世に存在する物体や現象は時間と共に変化していく。この現象と変化を一定の法則として整理したものが易経だと思ふ。易経は中国古代の哲学であるが、地理学と結びついたものが風水であると考える。

書経に「日月星辰」という言葉があり、太陽と月、星の動きを観察し、暦を作ることにつながっている。易の成り立ちを説明した繫辭伝けいじでんに「仰いで天を觀て、伏しては地理



高御位山

を察す」という有名な言葉がある。つまり天体と地理とを観察することが陰陽家にとって重要な仕事であったといえる。

風水は地形の吉凶を判断する巒頭と目に見えない気を判断する理気という二つの要素で組み立てられており、気の要素こそが易理から取りいれられているといえる。太陽や月、星の動きによって気象の変化を予測し、大地の形状によって吉凶を知るといふことだ。

中国では風水学を易学から派生したものとしている。おもしろいことに六十四卦に「風水渙」がある。上卦に風（巽）で下卦に水（坎）。それに続いて渙となつてゐる。「渙は散ること」を意味している。水の上を風が吹けば散るとなれば「葬経」に通じてゐるではないか。易経が先にあつて、風水思想に大きな影響を与えたと思えるのである。

また「三才」という言葉があるが、これは古代中国における世界観で、「天・地・人」の三つの要素で成り立っている。「天変地異」すなわち天候の変化は大雨や豪雪、旱魃、落雷などの天からの禍を天変とし、土砂崩れ、陥没、噴火、津波などを地異とした。そして、天が最上であつて、影響が大きく、予測しがたいが日月や星の動きを観測することによってその兆候を読み取ることができると考えたのだ。

山から地上を観察し、地形の状況を判断することは地理風水として主に築城に用いられた。これとは別に地上からある地点の上空の気を観測する望気術というものがある。望気術とは古代中国で城を攻略する際に城内の気が上空に立ち上る色によって籠城した兵士の士気を確認するものである。山中に埋蔵される金銀鉱物の気が立ち上るのを目で探知する術としても活用された。このように風水師や兵法家にとって天と地の観測は重要視すべきものであつた。

一方、人については出生の生年月日時間が個人の性格や運勢に大きな影響を与えるものと考え、四柱推命など命理術が考案された。しかしながら生年月日時間が同じであっても命運が同じであるわけではない。その違いについては立地や生活環境によって影響を受けることは否定できないのである。

「天・地・人」となっているのは天を最も影響するものとして最上のもとし、地はそれに次ぐものだが備えをすることによって禍をある程度防ぐことができる。人については傷つきやすい肉体を持ち、数十年の時間を生老病死という避けられない変化を持つ者ということで、最後にしたものと考ええる。

風水は地の優劣を判断するものであって古代の都市計画に用いられたことはいまでもない。邸宅や墓地の選地についても重要視された。こうした中で、群雄割拠する古代においては防災と共に、敵の攻撃から防御しやすい地形を選んで都市を形成したものである。福建省に多く見られる土楼はその一例と思う。

「天・地・人」に類似した言葉を探すと、紀元前500年頃の兵法家、孫子が著した「孫子の兵法（始計篇）」に「道、天、地、将、法」がある。兵法では天を戦機として天候や時間を、地を地形や陣形、人を統率の三要素として重視されるほか道は道理、すなわち大義名分である。法は統率のための軍法である。これらが揃わないと勝てないとした。一方で有名な儒家である孟子（紀元前372年〜紀元前289年）は「天の時、地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」という言葉を残した。すなわち、時期を見ることよりも、地形が重要で、地形よりも人材と統率力が重要であるということだ。

風水というものは環境の経験学と言えるもので、過去何千年もの歴史と経験則がこれまで伝えられてきたものだ。迷信だと一笑して終わるものではない。

孔子が著した論語に「温故知新」という有名な言葉がある。直訳すると「古きをたずねて新しきものを知る」

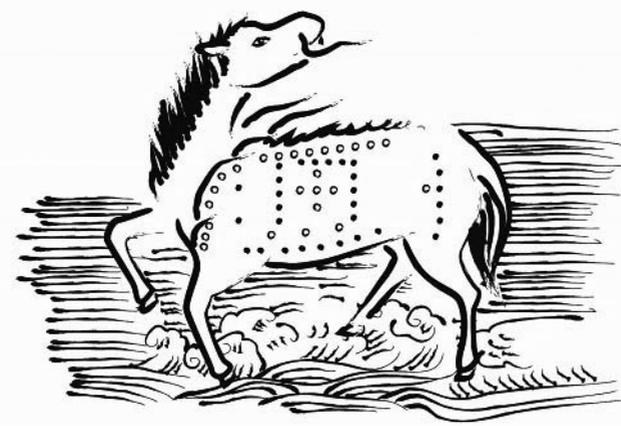
過去の知識を研究して新しいものが見えてくるとい
意味である。

風水も時代の変化と共にその考え方も不変のもの
あり、変化していくものもある。そのような考え方でこ
の本をまとめている。易経に「積善の家には必ず余慶あ
り」という言葉がある。良いことをしていると必ず慶び
ごとがあるという意味だ。易経は哲学として人の生きる
道を示しているのである。風水は易の思想を根本理念と
している。風水を学ぶ者は易経も学んでおかないとその
深奥が分かることはないだろう。



福建省の世界遺産「永定客家土楼」

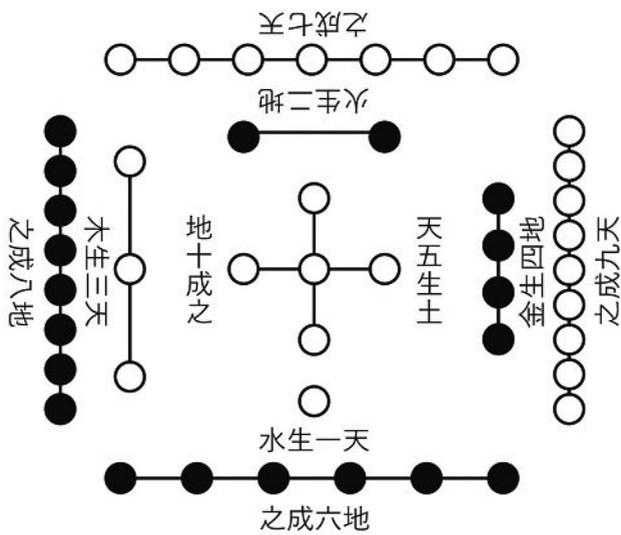
(1) 河か
図と



易経では古代の五帝として、伏羲、神農、黄帝、堯、舜と
している。伝説であるが中国古代最初の王、伏羲が黄河に現
れた馬を見てその背にあった不思議な模様を書き取った。こ
れを黄河から出た図ということで、河図と名付けた。

黄石公伝赤松子述「青囊経」に以下の文がある。

経曰天尊地卑陽奇陰偶一六共宗二七同道三八為朋四九為
友五十同途。

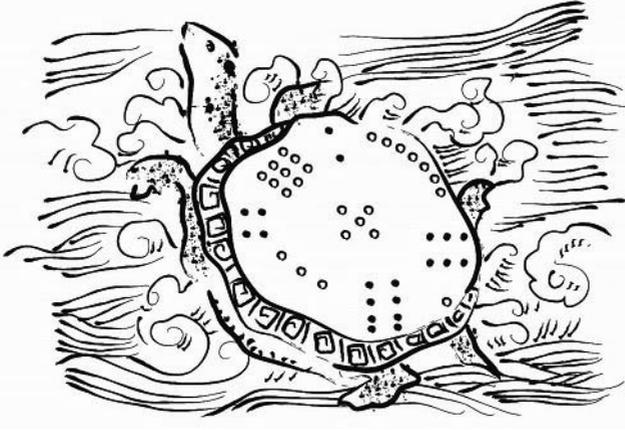


真ん中に五が置かれ、奇数と偶数が一定の法則で配置されている。天は奇数で陽、地は偶数で陰となる。それぞれ、一から四の数に中心の五を加えて同類のものとし、これを成数としている。その構成としては、一と六は北にあつて五行の水である。二と七は南にあつて火である。三と八は東にあつて木である。四と九は西にあつて金である。

	二七 火 南方	
三八 木 東方	五十 土 中央	四九 金 西方
	一六 水 北方	

(2) 洛書

五帝の最後の王である舜は黄河の支流である洛水を治水するため禹を採用した。禹は人々を率いて治水にあたり、自分の家の前を3度通ったが寄らないほど専念したと言われている。あるとき川岸に立った禹は、大きな亀が浮上したのを発見した。亀の背にあった黒白の不思議な斑点を見て書き取ったものを洛水から名をとって洛書と呼んでいる。禹はその後、治水に成功し堯に禅定され夏王朝の王となった。



四	九	二
三	五	七
八	一	六

横列

$$4 + 9 + 2 = 15$$

$$3 + 5 + 7 = 15$$

$$8 + 1 + 6 = 15$$

縦列

$$4 + 3 + 8 = 15$$

$$9 + 5 + 1 = 15$$

$$2 + 7 + 6 = 15$$

斜め列

$$4 + 5 + 6 = 15$$

$$2 + 5 + 8 = 15$$

亀の背にある斑点を数字に置き換えると、左の図になる。この模様は1から9までの数となっている。洛書の数は縦横斜めどの列を合計しても15となる魔法陣となっている。

正に完全なる配列とされ、これが神秘性をもってとらえられた。
河図と関係するところは、一と六、二と七、三と八、四と九が隣り合っているとある。河図と異なるところは、五が中央に位置するものの、十は存在しない。

先天八卦図

河図を元にして伏羲が作ったと言われる。乾、兌、離、震から反転して巽、坎、艮、坤と一周する。天は高いために、地は低いために下に位置している。乾(天)と坤(地)、艮(山)と兌(沢)、震(雷)と巽(風)、坎(水)と離(火)はそれぞれ陽と陰とが相対する関係となっている。



後天八卦図

洛書の図を元にして周の文王が作ったと言われるため文王八卦とも呼ぶ。これも離(太陽)は真上に、坎(水)は下に位置づけており夜だ。艮(東北)は夜明け前。太陽は震(東)に昇り、巽(東南)に上昇し、離(南)へと到達する。坤(西南)へと傾き、兌(西)は最後の輝きを示し、乾(西北)は日没する。このような一日を表している。また、八卦にそれぞれ九星をあてはめる。中央は数字が無いが五が位置する。



河図と洛書との関係

河図は先天八卦とされ洛書は後天八卦となったが、体用の関係とされた。つまり体が本体で、その姿を現し

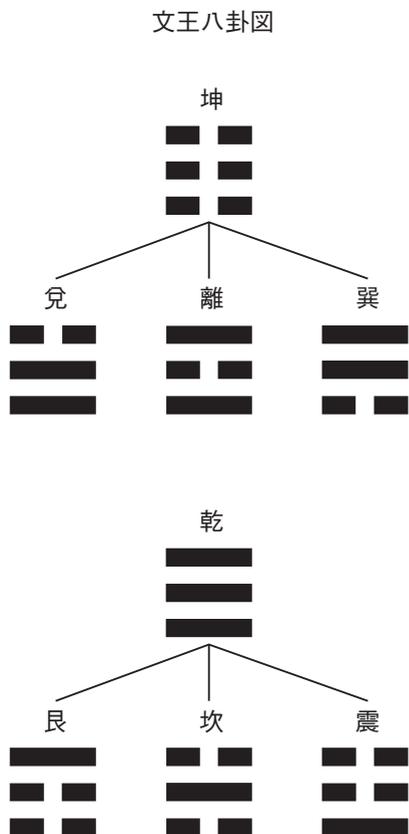
たものであり、用は作用のことでその働きを現している。

先天八卦と後天八卦は表裏一体とも言え、先天の乾は後天の離、先天の坤は後天では坎であって表裏の関係となっている。

先天後天対比表

後天	先天
離	乾
巽	兌
震	離
艮	震
坤	巽
兌	坎
乾	艮
坎	坤

乾を父とし、坤を母として陽と陰に分け、それから生み出させる三人の男子（陽）と三人の女子（陰）とを合わせ八卦とした。



八卦の意味

五行数	易数	季節	色	五行	方位	性質	人物	自然	
四、九	一	秋冬間	金	金	西北	剛健	父	天	乾
五、十	八	夏秋間	黄土	土	西南	従順	母	地	坤
三、八	四	春	青	木	東	奮動	長男	雷	震
三、八	五	春夏間	青緑	木	東南	伏入	長女	風	巽
一、六	六	冬	黒	水	北	陥險	二男	水	坎
二、七	三	夏	赤	火	南	美麗	二女	火	離
五、十	七	冬春間	茶色	土	東北	静止	三男	山	艮
四、九	二	秋	白	金	西	愉悦	三女	沢	兌

(3) 五行

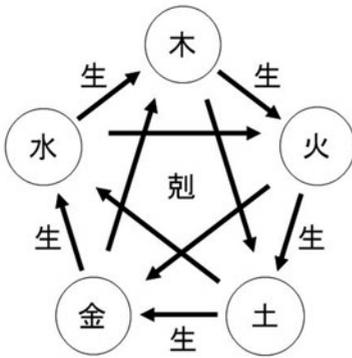
五行という言葉は隋代の蕭吉しやうきつの編集した「五行大義」に詳しく述べられている。その中で五行は「天地万物の根源」であるとし、世の中の万物は木、火、土、金、水の五大元素のいずれかに所属するものとした。

五行の相生相剋理論は風水にも広く取り入れられ、活用されている。当然のことながら玄空風水についても五行思想がいたるところに見られる

五行分類一覽表

水	金	土	火	木	五行
北	西	中央	南	東	五方
冬	秋	土用	夏	春	五時
黒	白	黄色	赤	青	五色
腎臓	肺臓	脾臓	心臓	肝臓	五臓
智	義	信	礼	仁	五常(徳)
壬、癸	庚、辛	戊、己	丙、丁	甲、乙	十干
亥、子、(丑)	申、酉、(戌)	丑、辰、未、戌	巳、午、(未)	寅、卯、(辰)	十二支

五行相生相剋の図



相生関係

木が火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生じるといふ五行循環を示している。相通じる良い関係である。

相剋関係

木は土を剋し、土は水を剋し、水は火を剋し、火は金を剋し、金は木を剋すといふ関係である。剋すといふのは打ち勝つといふ意味を持つ。

(4) 九星図

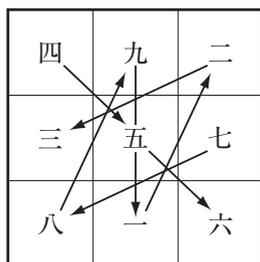
洛書を元にして九星図が作られた。九つの桁に一から九までの数を配置する。五を中宮に入れ、右下のように順に配置したものを定位置じょういばんという。これは停止しているものでなく、時間の変化によって数字が移動していく。この活動を飛泊と呼んでいる。その動きは中宮から始まって、乾宮→兌宮→艮宮→離宮→坎宮→坤宮→震宮→巽宮へと移動し、中宮へ戻る。つまり数字の変化については常に連続性を持っている。

一白、六白、八白と九紫が吉星なので紫と白を合わせて紫白九星という。

九宮図

巽宮	離宮	坤宮
震宮	中宮	兌宮
艮宮	坎宮	乾宮

九星図



北を上にする表示方法について

私は現代社会に合わせて北を上にして九星図を表示する。これには訳があつて。平成13年に近江一成先生と出会い、気学と挨星法を教えて頂いた。そのとき参考書としたのが、高島正龍著「八陣の秘法」であつた。ここでは北を上にして標示されていたのでそれがすっかり身につけてしまった。特に奇門遁甲では地図を見ることが多い。地図上で北は上として表示するのでその方がなじむのである。また、東洋思想研究者である中村

璋八駒澤大学名誉教授が「五行大義」(明德出版社)の中で、黄帝九宮経の図は北を下にしているが、尚書洪範伝の図は北を上にした盤として書かれている。そのほか、陰陽五行の研究家である吉野裕子氏は「陰陽五行思想からみた日本の祭」(人文書院)に九星と八卦の図で北を上にして表示されているのでそれに倣った。

黄帝九宮経

巽 四	離 九	坤 二
震 三	中宮 五	兌 七
艮 八	坎 一	乾 六

尚書洪範伝

	北			
	六	一	八	
西	七	五	三	東
	二	九	四	
	南			

したがって易や気学の世界では北を下にして表示するのが伝統的ではあるが、現代社会では北を上として地図を認識することが習慣となっており、風水で方位を表示する場合、今後はそのようにした表示方法に改める。

参考までに北を上にした表示で中宮に一から九まで入れた飛星盤の一覧を示す。

三碧中宮

四	八	六
五	三	一
九	七	二

二黑中宮

三	七	五
四	二	九
八	六	一

一白中宮

二	六	四
三	一	八
七	五	九

六白中宮

七	二	九
八	六	四
三	一	五

五黃中宮

六	一	八
七	五	三
二	九	四

四綠中宮

五	九	七
六	四	二
一	八	三

九紫中宮

一	五	三
二	九	七
六	四	八

八白中宮

九	四	二
一	八	六
五	三	七

七赤中宮

八	三	一
九	七	五
四	二	六

3 風水の流派

風水を見る対象としては巒頭らんとうと理気がある。巒頭は地形や地勢、建物の形について吉凶判断を行うもので流派が分かれていない。一方、理気というものは方位の吉凶を判断する方法であり、その判断基準が異なるため流派が存在する。中国では玄空飛星派や八宅派、三合派が多いようである。ただし、三合派については陰宅風水で使われることが多く、陽宅では少ない。

我が国ではこれまで八宅派が主流であったが、ここ10年くらいは玄空飛星派が普及しているようだ。海外に目を移すと中国本土、台湾、香港、韓国など東アジアにおいて販売されている書籍を見ると玄空飛星派のものを良く目にする。一昨年にカナダのトロントに旅行したが、チャイナタウンの書店では玄空風水のタイトルの書を発見してここにもあったかと喜んだほどだ。玄空飛星派の流派は章仲山が創始者の無常派を含めて六大流派に分かれているというが、実際にはさらに多くの分派があると考えて良い。